



TITLE:

腎細胞癌の両側副腎転移

AUTHOR(S):

増田, 富士男; 鈴木, 英訓; 鈴木, 正泰

CITATION:

増田, 富士男 ...[et al]. 腎細胞癌の両側副腎転移. 泌尿器科紀要 1992, 38(8): 933-935

ISSUE DATE:

1992-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/117625>

RIGHT:

腎細胞癌の両側副腎転移

東京慈恵会医科大学第三病院泌尿器科 (主任: 増田富士男教授)

増田富士男, 鈴木 英訓, 鈴木 正泰

BILATERAL ADRENAL METASTASIS FROM
RENAL CELL CARCINOMA

Fujio Masuda, Hidenori Suzuki and Masayasu Suzuki

From the Department of Urology, Daisan Hospital, the Jikei University School of Medicine

A case of renal cell carcinoma with synchronous bilateral adrenal metastasis occurring in a 76-year-old woman is reported. In our case, preoperative computed tomographic evaluation revealed the presence of bilateral adrenal metastasis, and simultaneous right radical nephrectomy and contralateral adrenalectomy were performed. Pathological examination revealed renal cell carcinoma of right kidney metastasizing to both adrenal glands. Bilateral adrenal metastasis from renal cell carcinoma is rare. Our case seems to be the fourth case in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 38: 933-935, 1992)

Key words: Renal cell carcinoma, Bilateral adrenal metastasis

緒 言

最近, 早期の小さい腎細胞癌が偶然に発見されることが多くなっている¹⁾が, 腎細胞癌は転移を生じ易いので, 初診時のおよそ30%に遠隔転移がみられるという^{2,3)}。同側の副腎転移はしばしばみられるが, 対側の副腎転移の報告は少ない。とくに両側の副腎転移ははなはだ稀である。われわれは右腎細胞癌の両側副腎転移を, 術前に CT スキャンで診断し, 根治的腎摘除術と同時に, 対側の副腎摘除術を行った1例を報告する。

症 例

K.N., 76歳, 女性。右大腿部痛を主訴として近医受診, 転移性骨腫瘍の診断で, 原発巣精査のため紹介され, 入院した。血尿, 腎部疼痛, 腎部腫瘍は認められず, 尿路外症状もなかった。入院時検査では, 血沈が1時間値 65 mm と亢進し, 貧血および α_2 グロブリンの上昇がみられたが, 腎機能, 血清電解質, 肝機能は正常で, 内分泌学的検査も異常なく, 高血圧は認められなかった。

静脈性腎盂造影で左腎は正常であるが, 右腎は中腎杯の充満欠損と上下腎杯の圧排変位がみられて, 腎中部の腫瘍性病変が考えられ, 超音波検査では, 同部の充実性腫瘍が認められた。CT スキャンでは右腎の腫

瘍とともに, 両側副腎の充実性腫大がみられ (Fig. 1), 右腎細胞癌の両側副腎転移と診断された。腎動脈造影では, 右腎および右副腎に hypervascular な腫瘍が認められたが, 左副腎の病変は明らかでなかった。全身骨シンチグラフィーでは右大腿骨, 第11胸椎の転移が診断されたが, 胸部撮影で肺転移は認められなかった。

右大腿骨転移に対して髓内固定術および放射線照射 45 Gy を行い, 症状の寛解がえられたので, 1986年1月17日, 肋骨弓下横切開にて, 経腹的に右根治的腎摘除術と左副腎摘除術を同時に行った。摘出右腎の重量は240 g で, 中部に 5.5×4.5 cm の腫瘍が認められ, 病理組織学的には腎細胞癌, 胞巣型, 淡明細胞亜型, grade 2, INF β pT3aNO であった。右副腎は 14 g で 2.5×2.0 cm の腫瘍が, 左副腎は 7 g で, 2.0×1.5 cm の腫瘍が認められ (Fig 2), 病理組織学的にはいずれも腎細胞癌の転移と診断された。術後ステロイドの補充療法とともに, 5-FU による化学療法を行い, 順調に経過していたが, 74日目に急性心不全のため死亡した。

考 察

腎細胞癌の同側副腎転移は 7~23%^{4,5)}と, 比較的しばしばみられる。これに対して, 対側副腎転移は少なく, 本邦では1988年に水田⁶⁾が14例を集めているが

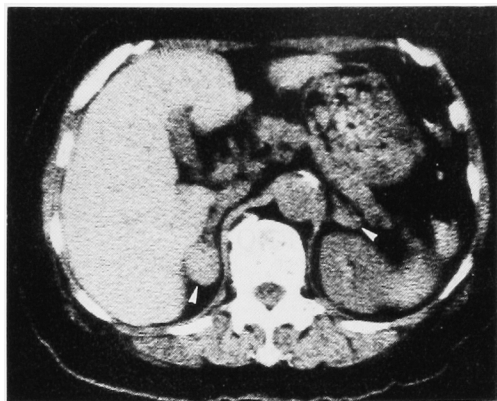


Fig. 1. CT scan shows bilateral adrenal tumors (arrows)

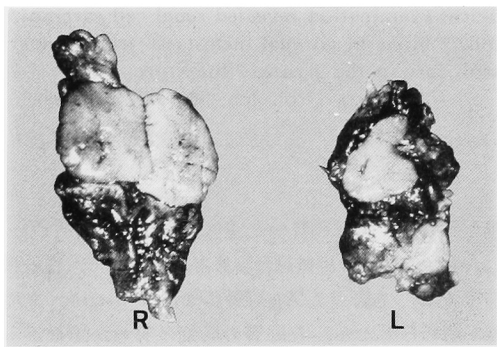


Fig. 2. Gross appearance of bilateral adrenal tumors

その後の症例を含めても現在までに18例の報告があるのみである。両側副腎転移の臨床例はさらに稀で⁷⁻¹⁰⁾、本邦ではわずかに3例の報告¹¹⁻¹³⁾がみられるのみであり、自験例は第4例目と思われる。これまでの3例は、いずれも両側副腎転移のみで、他臓器への転移はみられていないのに対し、自験例は骨転移もみられたが、治療により骨痛の寛解がえられたので、原発巣および両側副腎の摘除を行った。

自験例の転帰は不良であったが、峰山¹²⁾、は手術15月後再発なく健在な例を報告しており、岩松の例¹³⁾も術後8月、再発なく健在であり、根治性が期待される例では、積極的な手術が行われるべきである。また自験例のように、手術により根治性の可能性がなくても局所病巣による病状を寛解し、adjuvant chemotherapyの効果を増すために、両側副腎摘出を含む手術が考慮される。根治的腎摘除術と対側副腎摘除は同一の到達法で手術が可能であり、手術操作による侵襲の増加が少ないことも、積極的な治療が望まれる一因で

ある。いずれにせよ、対側副腎転移が、初診時に存在しうることを認識し、術前に診断し、正しい治療方針をきめることが大切である。副腎転移の診断は、自験例のようにCTが有用であるが、今後はMRIも用いられるであろう。

結 語

腎細胞癌の両側副腎転移の1例を報告した。本例は術前にCTで両側副腎転移が診断でき、腫瘍腎とともに手術的に摘出した。

文 献

- 1) 増田富士男, 鈴木博雄, 近藤 泉, ほか: 偶然発見された腎細胞癌の臨床・病理学的検討. 泌尿紀要 37: 1213-1227, 1991
- 2) 本間之夫, 杉本雅幸, 養和田滋, ほか: 腎細胞癌124例の治療成績. 日泌尿会誌 81: 726-731, 1990
- 3) Dreicer R and Williams RD: Renal parenchymal neoplasms. In: Smith's General Urology. Edited by Tanagho EA and McAninch JW, 13th ed. pp. 359-377, Appleton & Lange Norwalk. 1992
- 4) Hadju SI and Thomas AG: Renal cell carcinoma at autopsy. J Urol 97: 978-982, 1967
- 5) Wright FW: Adrenal metastasis from renal carcinoma diagnosed by selective renal angiography. Br J Urol 46: 472-474, 1974
- 6) 水田耕治, 横田武彦: 対側副腎転移を伴った腎細胞癌の1例. 西日泌尿 50: 601-604, 1988
- 7) Zornova J and Bernardino ME: Bilateral adrenal metastasis: "head light" sign. Urology 15: 91-92, 1980
- 8) Luciani L, Scappini P, Pusioli T, et al.: Aspiration cytology of simultaneous bilateral adrenal metastases from renal cell carcinoma. A case report and review of literature. J Urol 134: 315-318, 1985
- 9) Tasca A, Calabro A, Aragona F, et al.: Bilateral adrenal metastasis from renal cell carcinoma. A case report. Acta Urol Belg 55: 369-372, 1987
- 10) Selli C, Carini M, Barbanti G, et al.: Simultaneous bilateral adrenal involvement by renal cell carcinoma: Experience with 3 cases. J Urol 137: 480-482, 1987
- 11) 久住治男, 高野 学: 両側副腎に比較的大きい転移性腫瘍を伴った腎癌例. 臨泌 34: 1105-1109, 1980
- 12) 峰山浩忠, 小松原秀一, 阿部礼男: 両側副腎転移を示した腎細胞癌の1手術例. 西日泌尿 43: 997-1001, 1981
- 13) 岩松克彦, 岡 聖次, 武本征人, ほか: 両側副腎

転移を伴った腎細胞癌の1例. 日泌尿会誌 74:
281, 1983

(Received on November 5, 1991)
(Accepted on December 18, 1991)